

# 『夢』

沼田 侑実(ぬまた ゆみ)

3,060文字

あらすじ

寒いのが苦手な美佳。そしてその寒い中に行う年末のイベント、大掃除が待っていた。  
でも今年はおばあちゃんの為に、あれだけは頑張ろうかな……。

寒っ。またこの季節か。キラキラとした暑い夏が終わってからも、しばらくは半袖で過ごせる日が続いていたのにな。気持ちの良い季節、食欲と睡眠の秋が、台風と共にあっという間に過ぎ去り、冬になっていた。寒いのは苦手だけど、冬は冬でクリスマスやお正月、バレンタインといった楽しいイベントが沢山あるから好き。でも、ただ一つ、美佳にはどうしても好きになれないイベントがあった。年末になるとやってくる、寒さに耐えながらの大そうじ。確かに、掃除が終わると達成感があり、綺麗になった部屋が清々しい。でも、あんなに寒い中にやらなくたって。もっとも暑い真夏に汗をかきながら掃除するのも辛いが……。適当にささっとやって終わらせよう。最近はお父さんもお母さんも仕事が忙しい。あっ、でも今年はおばあちゃんの為に、あれだけは頑張ろうかな。

いつ頃からだろう。小学生になった頃には、いつのまにか私の担当になっていた。おばあちゃんとお仏壇がある和室に、新聞紙を2枚広げて準備した。お父さんとお母さんが忙しく動き回っている中、ここだけはお茶会でも始まるかのようなゆったりさだ。おばあちゃんは、お仏壇にあるチンと鳴らすお鈴、火立て、飾り香炉、お線香を立てる灰が詰まった前香炉を新聞紙の上に降ろしてきた。ここからが私の仕事。力もない、背も低い、まだ小さな私が役に立つ仕事。一年間の黒ずんだ汚れを貼りつけた仏具を磨いていく作業。お父さんが着古した綿の白いTシャツを、使いやすい大きさに切り分けたもので磨いていく。クリームを布に付けたら、少し力を入れて擦っていく。たちまち真っ白な布が黒くなっていった。それとは逆に仏具は少しずつ輝きを取り戻していった。仏具だけあって有難いような、心が洗われるような気分になる。濁った面がないようにひたすら磨いていった。私は何かをやりだすと、のめり込んでしまう性格である一方、長くは続かなく大概是飽きやすい。つまり、熱しやすく冷めやすいと言ったところだ。一年に一回と言うのが私に合っている。

お鈴を磨くのは、初心者向きと言っていい形状だ。お椀型の内側に手を入れ、ただ周りをみがいていけばよい。火立ては、形の悪い痩せ細ったバウムクーヘンのような形で、凸凹と波打っているのが難しい。さらに、先端はロウソクが安定して立てられるように尖っていて、溶け残ったロウがこびりつき、それも削り落としながら綺麗にする必要がある。飾り香炉はただの飾り。特に使われる道具ではないから、一年間、ひっそりとしていた。一番複雑な形状でコロンとしていて可愛いが、私が気にして目にするのは、この掃除の時だけ。細かい細工部分まで丁寧に磨いていく。最後は前香炉。おばあちゃんは、羽のようなハタキでお仏壇の中を掃除していたが、前香炉と一緒に掃除をする。

毎朝起きると一番に、おばあちゃんの部屋へ行き、  
「おはようございます。」

と堅苦しく挨拶し、既に火を点け立てられているロウソクの炎の先端に、お線香を近づけ、手で仰いで火を消す。お仏壇に届くような背丈になった頃からのルーティーンとなった。最後はお鈴を一回だけ、チンと鳴らして拜む。家族みんなが毎日そのルーティーンをこなし、一年間かけて積み固くなった灰が前香炉にはいっぱい詰まっていた。このままでは磨けないので、一度全ての灰を、篩が乗せてあるボールの中へそっと入れられた。おばあちゃんがそれを庭に持って行き丁寧に篩いにかける。その間に私が磨いていく。この前香炉が一年で一番活躍したかな。内も外も磨き終わり、篩ってやわらかくなった灰を半分だけ戻す。そして、また一年、静かに少しずつ灰を積もらせていくのだ。

仏具磨きが終わり清々しい気持ちで休んでいると、お母さんから、「終わったなら、自分の机を片付けなさい。」と次の指令が言い渡されるのだった。

おばあちゃんは、今年の夏の暑いさなかに他界した。八十八歳と、まあまあ長生きだった。口を開けば文句ばかり言っているような人で、お母さんも大変だったと思う。ただ、一人息子のお父さんをもものすごく可愛がっていた。実際はお父さんは末っ子だ。五人子供がいたが、戦争で亡くなり、叔母さんとお父さんの二人が生き残った。おじいちゃんもその時に亡くなった。女手ひとつで生きてきただけあって、気が強いばあさんとなっていたのだろう。我が家はおばあちゃんが王様で、誰も逆らえない。意地悪な人だなと言う印象もあれば、子供の頃によく散歩と言っては本屋へ行き、好きな本を買ってくれた。優しいところもあったな。そんなおばあちゃんが数年かけて段々と、ゆっくりだが確実に弱っていった。でも、亡くなる直前まで文句を言っていた気がする。

「腰が痛くて歩けない。」

(でも、歩いていた。)

「ご飯なんて食べられない。」

(でも、好きなものは結構普通に食べていた。)

「病院なんて、みんな冷たいよ。」

(勝手に何処かに居なくなるから、怒られていた。)

「みんなで旅行へ行きたかった。」

(これは、元気なときにもっと行ってあげたら良かったな。)

私には、

「美佳、早く結婚しなさい。」

と。まだ十代で学生ですけど……。

そんなおばあちゃんが私の夢に出てくるようになったのだ。秋頃に始めて夢の中で文句を言われた。今思い返してみると、ちょうどお彼岸の頃だ。おはぎが小さいと言っ

ていた。毎年、おはぎはおばあちゃんが手作りしていた。確かに我が家で作るおはぎは市販のものよりも1.5倍はあった。今年は出来合いのものを買ってきて、お仏壇にお供えした。初めは、今年は作らなかったという後ろめたさからきた夢で、「おばあちゃん、私の夢に出てきてまで文句言っていたよ。」

と、家族で笑い話となった。

次に夢に出てきたのは、十五夜のあと。

「きぬかつぎが無かったね。」

おばあちゃんがぶつぶつ文句を言っていたのを、朝、目が覚めても印象強く覚えていた。きぬかつぎとは、小ぶりの里芋を茹でたもので、つるんと皮をむいたら、醤油をちょんちょんと付けていただく。我が家では十五夜の団子と共に供えていた。おはぎ同様、今年は簡単にお団子だけで済ませたのだ。

美佳は、後ろめたさから見る夢なのか、本当におばあちゃんがわざわざ文句を言う為に夢に出てきているのか分からなくなった。何だか後者のような気がしてきた。極め付けが、

「栗を供えろ。」

と、言うおばあちゃんからの指令が出たのだ。

「私は栗が一番好きなんだよ。早く栗をお供えしなよ。大粒のね。」

夢の中で、これは夢だと自覚しながら目が覚めた。こんなに目覚めてすぐに動いた事はないくらい慌てて、

「お母さん、やっぱりおばあちゃんが夢の中で指令してる！！」

「今度は何だって？」

と、お母さんも半ば信じきっていた。

「栗、大粒の栗を供えろって。」

「ああ、ばあさんは何よりも栗が好きだったからな。」

お父さんも納得してしまっている。

それから、我が家では、私を通じておばあちゃんの指令は度々下され、

「死んでからも、この家を仕切るんだから。まったくどこで見ているんだか。」

お母さんのつぶやきも、度々聞こえてきた。

私としては、おばあちゃんらしいなど笑ってしまう。お母さんに遠慮して、私の夢に出てくるところも。私が家族に伝えなければゴタゴタしないのだ。あまりにも仕事が忙しくお母さんが疲れているときは、指令は私がそっと引き受けた。そんな所も見越して私が選ばれたのだろう。だから、今年はお仏壇の掃除は私が頑張るしかないな。だって、初夢がおばあちゃんの文句なんて嫌なもの。

(了)